

日本語およびトルコ語における 外来語の効果意識を構成する因子と 受容意識との関連性

Levent TOKSOZ

1.はじめに

日本語においてもトルコ語においても近年「外来語の氾濫」ということがよく話題にのぼり、両国では外来語の増加に歯止めをかけるために分かりにくい外来語の言い換えの提案が行われている(国立国語研究所「外来語」委員会(2007)、Ercilasun(1998)等)。言い換え提案を行うためには、各言語における外来語の現状に対する意識を把握する必要があり、日本でもトルコでも意識調査が行われてきた。例えば、日本では、外来語の現状に関する評価や外来語がもたらす印象に関する研究には既に多くの蓄積があり(熊抱(2004)、陣内(2007)等)、日本人大学生は「外来語受容意識」が高いことが従来から指摘されている(文化庁(2002)等)。日本ほど頻繁ではないが、トルコにおいても外来語を巡る意識調査が行われており、トルコ人大学生は「外来語受容意識」が低いことが指摘されている(Osam(1997))。また、König&Somuncu(1993)によると、外来語が「トルコ語を破壊する」と回答した学生は90%を超え、逆に、肯定的な立場を示す学生は7%に留まっている。

しかし、梁(2005)でも指摘されているように、上記のような意識調査には、外来語に対する評価を尋ね、それらを単純集計したものが多い。外来語意識の全体像を把握するためには、その意識構造を探索的に明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、日本でもトルコでもまだ十分に論じられていない、「外来語受容意識」の規定因、即ち、「外来語受容意識」を促進あるいは抑制する因子について検討し、具体的には、「外来語受容意識」と「外来語効果意識」の関連に着目する¹⁾。

本研究で使う「外来語受容意識」(以下、「受容意識」と略す)とは、外来語が母語に流入することに対して話者の示す肯定的・否定的評価を意味する。例えば、外来語が母語に入ることを好ましく感じ、外来語の増加を支持するような話者を「外来語受容意識」が高いとする。それに対して、「外来語効果意識」(以下、「効果意識」と略す)とは、外来語を使うことに話者が感じる効果に関する印象を表す。外来語の効果には、プラス効果(良い印象)とマイナス効果(悪い印象)がある。例えば、「外来語を使うことによって格好良さを感じる」という印象は、外来語使用のプラス効果、「外来語を使うことによって母語の伝統が破壊される」という印象は、外来語使用のマイナス効果である。

上述のように、日本人大学生は「受容意識」が高く、外来語に肯定的であること、その一方、トルコ人大学生は「受容意識」が低く、外来語に否定的であることが既に明らかにされている。本稿では、日本人およびトルコ人の「受容意識」の規定因を探り、両国で「効果意識」がどのような因子から構成されているか、さらに、それらの因子が彼らの「受容意識」にどれほど影響を与えているかを明らかにすることを目的とする。

外来語の増加に歯止めをかけるために、言い換えのような言語政策が行われてきたという共通点と、話者が外来語に示す好ましさが正反対であるという相違点がある日本人とトルコ人を直接対照させることは、それぞれの言語において、外来語が占めている地位を把握する上で意義があると筆者が考えている。

2. 調査概要

2.1 調査協力者

広島大学に在籍する日本人大学生 135 名（男性 46 名、女性 89 名、平均年齢：21 歳、標準偏差:1.8）、そして、チャナッカレ大学に在籍するトルコ人大学生 153 名（男性 58 名、女性 95 名、平均年齢：20.9 歳、標準偏差:1.7）、合計 288 名を対象に、質問紙による調査を実施した（調査期間は 2010 年 11 月～2011 年 4 月）。

2.2 質問紙の構成

両国の大学生が母語における外来語の効果をどのように評価しているかを把握するために、上記の調査協力者とは別に、日本では 58 名、トルコでは 32 名に自由回答形式による予備調査を行った。予備調査では、被調査者の母語における外来語の現状を総体的に考えた時、外来語が母語に入ることにどのように感じているかを質問した。得られた回答を日本とトルコ別々にカテゴリー化し、質問項目を作成するために使用した。

予備調査の分析結果を基に、「効果意識」に関して日本では 27 項目、トルコでは 22 項目を設定し、さらに、Osam(1997)を参考に、日本とトルコそれぞれに、話者の「受容意識」を測定する 3 項目（「外来語が日本語/トルコ語に入ることは好ましい」、「外来語がこれから増えても危機感を覚えない」、「外来語の日本語/トルコ語への貢献は与える被害よりも大きい」）を付け加えた。そこで、日本については合計 30 項目、トルコについては合計 25 項目に対して、1. 「そう思わない」、2. 「あまりそう思わない」、3. 「どちらとも言えない」、4. 「ややそう思う」、5. 「そう思う」の 5 段階で回答を求めた。

2.3 分析方法

日本人とトルコ人それぞれで「効果意識」がどのような因子から構成されているか探るために「効果意識」を測定する項目（日本人 27 項目、トルコ人 22 項目）に因子分析を行い、得られた因子が「受容意識」にどれほど影響を与えているかを探るために、両者の間で相関関係が見られるかを確認し、重回帰分析を行った。

3. 分析結果

3.1 日本人大学生の「効果意識」を構成する因子と「受容意識」との関連性

3.1.1 日本人大学生の「効果意識」を構成する因子

日本人大学生の「効果意識」を測定する 27 項目への回答に関して、因子分析（主因子法、固有値 1 以上の値について varimax 回転）を行い、因子負荷量が 1 つの因子について .40 以上で、かつ 2 因子にまたがって .40 以上の負荷を示さない 17 項目を選出した。その結果、解釈可能な 4 因子が抽出された。【表 1】を見られたい。

【表 1】日本人大学生の「効果意識」の因子分析

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
	格好良さ	会話親和	表現豊富	軽率さ	
格好良さ($\alpha : .79$)					
国際感覚	0.8	0.19	0.06	0.07	0.69
外国文化への興味	0.67	0.02	.15	0.07	0.48
格好良い	0.58	0.21	0.07	0.02	0.38
外国の知識	0.5	0.04	0.13	-0.03	0.27
知的感	0.41	0.19	-0.01	0.05	0.2
新しさ	0.41	-0.01	0.34	0.05	0.3
会話親和($\alpha : .76$)					
親しみやすい	0.1	0.76	0.05	-0.16	0.62
会話が楽しめる	0.17	0.62	0.13	-0.14	0.46
話を通じる	0.16	0.58	0.06	-0.28	0.43
自分自由に表現	0.28	0.57	0.03	0.12	0.42
悪いイメージ緩和	-0.15	0.4	0.23	0.25	0.3
表現豊富($\alpha : .66$)					
物事表現	0.09	0.04	0.66	0.01	0.45
ニュアンス表現	-0.38	0.12	0.53	0.04	0.44
日本語豊か	0.15	0.16	0.41	-0.12	0.23
軽率さ($\alpha : .61$)					
軽薄な感じ	-0.07	-0.04	-0.03	0.69	0.5
気取っている感じ	0.13	-0.04	-0.05	0.47	0.24
誤解	0.22	-0.22	0.1	0.4	0.26
因子寄与	2.43	2	1.16	1.09	
寄与率	14.4	11.8	6.9	6.4	

第 1 因子において負荷量の高い項目は、「国際感覚」（外来語によって国際感覚を味わえる）、「外国文化への興味」（外来語を通して外国の文化に興味があく）、「格好良い」（外来語を使うことによって格好良さを感じる）、「外国の知識」（外来語によって外国に対する知識が広がる）、「知的感」（外来語を使うことによって知的な感じを表すことができる）、「新しさ」（外来語を使うことによって新しさを感じる）の 6 項目であった。従って、この因子は外来語の使用から受ける好印象を示す因子と解釈される。そこで、この因子を「格好良さ」因子と命名した($\alpha : .79$)。

第 2 因子において負荷量の高い項目は、「親しみやすい」（外来語を使うと相手との会話がより親しみやすくなる）、「会話が楽しめる」（堅苦しい日本語と違って、外来語によって

会話が楽しめる)、「話を通じる」(外来語を使うことによって話を通じやすくなり、便利である)、「自分自由に表現」(外来語を使うことによって、日本語の束縛感から解放され、自分をより自由に表現できる)、「悪いイメージ緩和」(外来語を使うことによって、同じ意味で使っていたことばの悪いイメージが和らぐ)の5項目であった。従って、この因子は、外来語を使用すると会話全体の親和性が増すという気持ちを表す因子と解釈される。そこで、この因子は「会話親和」因子と命名した(α :.76)。

第3因子において負荷量の高い項目は、「物事表現」(外来語を使うことによってこれまでになかった事物や考え方を表せる)、「ニュアンス表現」(外来語を使うことによって日本語で表現しにくい微妙なニュアンスを表せる)、「日本語豊か」(外来語によって日本語の表現が豊かになる)の3項目であった。従って、この因子は、外来語の使用によって、日本語の表現がより豊かになるという気持ちを表していると解釈される。そこで、この因子を「表現豊富」因子と命名した(α :.66)。

第4因子において負荷量の高い項目は、「軽薄な感じ」(外来語は軽薄な感じを与える)、「気取っている感じ」(外来語はいかにも気取っている感じを与える)、「誤解」(外来語を使うことによって誤解や意味の取り違えが起こる)の3項目であった。この因子は、外来語を使用すると話し相手に好ましくない印象を与えたり、誤解を招いたりするという気持ちを表していると解釈される。そこで、この因子を、「軽率さ」因子と命名した(α :.61)。

このように、因子分析の結果、日本人大学生の「効果意識」は、「格好良さ」、「会話親和」、「表現豊富」、「軽率さ」の4つの因子から構成されていると考えることができる。

3.1.2 日本人大学生の「効果意識」を構成する因子と「受容意識」との関連

日本人大学生の外来語に対する「効果意識」を構成する「格好良さ」、「会話親和」、「表現豊富」、「軽率さ」の4つの因子と「受容意識」(「外来語が日本語に入ることは好ましい」、「外来語がこれから増えても危機感を覚えない」、「外来語の日本語への貢献は与える被害よりも大きい」)の関係を検討するために、相関係数を求めた。【表2】を見られたい。

【表2】日本人大学生における「効果意識」を構成する各因子と「受容意識」との相関

	受容意識	格好良さ	会話親和	表現豊富	軽率さ
受容意識	1				
格好良さ	.33**	1			
会話親和	.39**	.30*	1		
表現豊富	.32**	0.01	.27*	1	
軽率さ	-.23*	0.01	-0.01	-0.04	1

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

日本人大学生の「受容意識」は、「格好良さ」(r :.33, $p < .01$)、「会話親和」(r :.39, $p < .01$)、「表現豊富」(r :.32, $p < .01$)と正の相関が、そして「軽率さ」(r :-.23, $p < .05$)とは負の相関が見られる。そして、「会話親和」と「格好良さ」(r :.30, $p < .05$)、「表現豊富」(r :.27,

$p < .05$)の間でも有意な相関が見られる。

そこで、日本人大学生の「受容意識」にはこれらの因子がどれほど影響を与えているのかを探るために、「受容意識」を測定する3項目の平均点を従属変数にし、「効果意識」の各因子の平均点を独立変数とした重回帰分析を行った(強制投入)。結果を【表3】に示す。

【表3】日本人大学生における「受容意識」の重回帰分析

	β
格好良さ	.30***
表現豊富	.24**
会話親和	.22**
軽率さ	-.20**
R^2	.30***

** $p < .01$, *** $p < .001$

【表3】によれば、日本人大学生の「受容意識」には、「格好良さ」($\beta = .30$, $p < .001$)、「表現豊富」($\beta = .24$, $p < .01$)、「会話親和」($\beta = .22$, $p < .01$)、「軽率さ」($\beta = -.20$, $p < .01$)の順で「効果意識」を規定する4つの因子も有意に影響を与えており、「受容意識」を唯一抑制する「軽率さ」因子は影響力が最も弱い($R^2 = .30$ ($F(4, 134) = 14.08$, $p < .001$))。

3.2 トルコ人大学生の「効果意識」を構成する因子と「受容意識」との関連性

3.2.1 トルコ人大学生の「効果意識」を構成する因子

トルコ人大学生の外来語に対する「効果意識」がどのような因子から構成されているかを探るために、「効果意識」に関する22項目への回答に関して、因子分析(主因子法, 固有値1以上の値についてvarimax回転)を行い、因子負荷量が、1つの因子について.40以上で、かつ2因子にまたがって.40以上の負荷を示さない12項目を選出した。結果、解釈可能な2因子が抽出された。【表4】を見られたい。

第1因子において負荷量の高い項目は、「格好良い」(外来語を使うことによって格好良さを感じる)、「外国文化への知識」(外来語を通して外国への知識が広がる)、「新しさ」(外来語を使うことによって新しさを感じる)、「知識感」(外来語を使うことによって知的な感じを表すことができる)、「外国の知識」(外来語によって外国に対する知識が広がる)、「話が通じる」(外来語を使うことによって話が通じやすくなり、便利である)、「悪いイメージの緩和」(外来語を使うことによって、同じ意味で使っていたことばの悪いイメージが和らぐ)の7項目であった。従って、この因子は外来語から受ける好印象を示す因子と解釈される。そこで、この因子を「格好良さ」因子と命名した($\alpha : .80$)。

第2因子において負荷量の高い項目は、「伝統価値から乖離」(外来語を使う人は伝統的価値観が薄い人である)、「母語伝統破壊」(外来語を使うことによってトルコ語の伝統が破壊される)、「自信持てない人」(類義の本来語より外来語を選択する人は自分に自

信が持てない人だと思ふ)の3項目であった。従って、この因子は、外来語を使用すると伝統が破壊されるという危惧を示す因子と解釈される。そこで、この因子は「伝統破壊」因子と命名した($\alpha : .71$)。

【表4】トルコ人大学生の「効果意識」の因子分析

質問項目	因子1 格好良さ	因子2 伝統破壊	共通性
格好良さ($\alpha : .80$)			
格好良い	0.69	0.05	0.48
外国文化への興味	0.68	0.17	0.49
新しさ	0.59	0.07	0.35
知的感	0.57	-0.09	0.33
外国の知識	0.52	-0.07	0.28
話を通じる	0.46	-0.38	0.36
悪いイメージの緩和	0.42	-0.27	0.26
伝統破壊($\alpha : .71$)			
伝統価値から乖離	-0.12	0.78	0.62
母語伝統破壊	-0.12	0.6	0.38
自信持てない人	0	0.54	0.29
因子寄与	2.32	1.54	
寄与率	23.2	15.4	

このように、因子分析の結果、トルコ人大学生の「効果意識」は、「格好良さ」と「伝統破壊」の2つの因子から構成されていると考えることができる。

3.2.2 トルコ人大学生の「効果意識」を構成する因子と「受容意識」との関係

トルコ人大学生の外来語に対する「効果意識」を構成する「格好良さ」と「伝統破壊」の2因子と「受容意識」(3.1.2 参照)の関係を検討するために、相関係数を求めた。【表5】を見られたい。

【表5】トルコ人大学生の「効果意識」を構成する各因子と「受容意識」との相関

	受容意識	格好良さ	伝統破壊
効果意識	1		
格好良さ	.50**	1	
伝統破壊	-.61**	-.37**	1

** $p < .01$

【表5】から分かるように、トルコ人大学生の「受容意識」は「格好良さ」($r : .50, p < .01$)との間で正の相関が、「伝統破壊」($r : -.61, p < .01$)との間で負の相関が見られる。そして「格好良さ」と「伝統破壊」の間でも負($r : -.37, p < .01$)の相関がある。

そこで、トルコ人大学生の「受容意識」にこれらの2因子がどれほど影響力を与えているかを調べるために、「受容意識」を測定する3項目の平均点を従属変数にし、「効果意識」

の各因子の平均点を独立変数とした重回帰分析を行った（強制投入）。結果は【表 6】の通りである。

【表 6】 トルコ人大学生における「受容意識」の重回帰分析

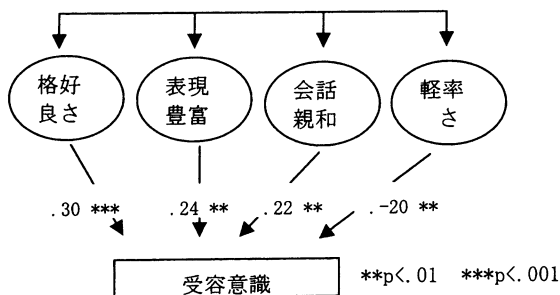
	β
格好良さ	.31***
伝統破壊	-.50***
R^2	.46***

*** $p < .001$

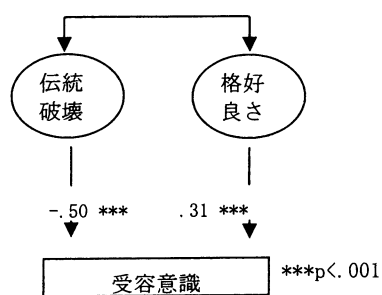
【表 6】によれば、トルコ人大学生の「受容意識」には「伝統破壊」（ $\beta = -.50$, $p < .001$ ）および「格好良さ」（ $\beta = .31$, $p < .001$ ）の2因子も有意に影響を与えており、「受容意識」を抑制する「伝統破壊」因子の方が影響力が強い（ $R^2 = .46$ ($F(2, 151) = 66.27$, $p < .001$ ））。

4. 総合的考察とまとめ

本稿では、日本人大学生とトルコ人大学生を対象に、外来語の「効果意識」を構成する因子、また、これらの因子と「受容意識」の関連について検討した。結果は【図 1】および【図 2】に図示した通りである。



【図 1】 日本人大学生の「効果意識」を構成する因子と「受容意識」との関連



【図 2】 トルコ人大学生の「効果意識」を構成する因子と「受容意識」との関連

日本人大学生の「受容意識」は、「効果意識」を構成する「格好良さ」、「表現豊富」、「会話親和」の3つの因子によって促進されており、「軽率さ」因子のみが抑制の方向に働いている。一方、トルコ人大学生の「受容意識」は「効果意識」を構成する「伝統破壊」因子によって強く抑制されており、「格好良さ」因子によって促進されている。

以下、「効果意識」構成させるそれぞれの因子の特性と、「受容意識」との関連について検討する。

まず、「格好良さ」因子が、両国において「受容意識」を促進させていることは、「受容意識」の高低と関係なく、日本人大学生にもトルコ人大学生にも意識されていることを意

味している。この因子に含まれる「新しさ」、「知的感覚」、「外国の知識」のような項目は両国においては共通している。

しかし、「分かりやすさ」や「悪いイメージの緩和」のような項目は、日本では「表現豊富」因子に含まれているのに対して、トルコでは「表現豊富」因子が抽出されておらず、「格好良さ」因子に属していることが興味深い。その原因として、言語生活の面では、日本語の方がトルコ語に比べて外来語がより深く浸透していること、即ち、外来語への依存度がトルコよりも高いことが考えられる。石綿 (2001:18) は、約 50 年前に国立国語研究所の行った「雑誌 90 種の用語用字調査」から、当時の外来語の異なり語数は全体のおよそ 1 割であると述べている。他方、トルコでは、1870 年から 1995 年までのトルコ人小説家の小説 562 冊を対象にした Sezgin (2004) によれば、外来語使用は全体の約 3% ぐらいであり、1990 年から 1995 年までの比較的最近の小説にしても、外来語の使用率は全体の約 4% となっている。陣内 (2007:9) は、豊田 (1977) 『ビバ日本語』という小説の中に見られる事例を引いて、(a)を見れば、現在「パン」や「トースター」等の外来語がいかに日常語として浸透しているかが、また、(b)を見れば、外来語がいかに多様に使用されているかが分かる主張している。

- (a) それから台所に立って、洋餅を焼き器に放りこみ、襯衣を身につけ襟締を首に巻き付け、いそいで袴を引き上げた。
- (b) みんなアット・ホームなアトモスフェアでやってくれ。ここならどんなアイデアを喋っても OK だぞ。さ、ブレイン・ストーミングをオープンするぞ。

このように、日本語と比べて、トルコ語は、外来語の割合がかなり少なく、外来語への依存度が低いと考えられる。そこで、「外来語によってトルコ語の表現が豊富になっている」という意識がなく、「分かりやすさ」や「悪いイメージの緩和」のような項目は、むしろ、外来語の与える「格好良さ」因子と結びつきやすいと考えられる。

日本語のみで抽出されているもう一つの因子は「軽率さ」である。日本人大学生の「受容意識」を唯一抑制させるこの因子も、日本語の外来語への依存度と密接な関連を持っていると考えられる。この因子は、上記の「表現豊富」因子と裏表の関係にある。即ち、日本において外来語の数量が多いということは、日常生活で意味が分からず、話者を困らせる、または、軽薄な感じを与える外来語と接触する機会をも同時に増加させている。この「軽率さ」因子は、「コンセンサス」、「ペシミスト」のように、親密度が低く、まだ日本語として定着していない外来語に抱かれやすいと考えられる。このように、日本では、外来語はコミュニケーション上欠かせない要素である一方、コミュニケーションの妨げになることもあるということである。

日本のみで抽出され、「受容意識」を促進させるもう一つの因子は、「会話親和」因子で

あった。この因子には、外来語が、相手との会話をより親しみやすく、楽しいものと感じさせることができるという意識が表れている。たとえば、相手に助言する際に「…した方が良い」と言う代わりに「…した方がベター」と言った方が、ことばのストレートなイメージが和らげられるだけでなく、相手との会話をより親しみやすく、楽しいものと感じさせることができると考えられる。また「ゲットする」という外来語も類義語の「手に入れる」、「もらう」よりは、相手との会話をより親しみやすく、楽しくさせると考えられる。外来語のこの効果は、若い人たちの会話でよく見られる“若者ことば”と似た働きを果しているようである。さらに、「会話親和」因子に含まれる項目には、日本語の与える「堅苦しさ」、「束縛感」から逃げられるということも同時に含まれ（例：「堅苦しい日本語と違って、外来語によって会話が楽しめる」、「外来語を使うことによって、日本語の束縛感から解放され、自分をより自由に表現できる」〔下線部筆者〕）、外来語使用には、母語の与えるこのようなマイナス感覚からの解放装置としての一面も存在すると言えよう。それでは、外来語の「会話親和」効果は、どうして日本語のみにおいて見られたのだろうか。

その背景には、日本とトルコの言語社会の違いがあると考えられる。日本語の場合、話し手には、相手と場面への配慮が期待される。例えば、敬語表現の使用について、井出（2006:156）は、「話している相手との距離に応じて、あるいは場面の改まり、ウチとソトの区別などに応じて丁寧な言語形式を使ったり使わなかったりする」と述べている。このように、常に場面に応じた話し方の選択を迫られる日本人大学生は、外来語を、母語から受ける「束縛感」、「堅苦しさ」のような圧力から解放してくれる言語装置であると見なしているのではないかと予測できる。外来語使用の与えるこの自由な感覚は、そのまま相手との会話をより親しみやすく感じさせると考えられる。結局、日本人大学生は、日本語の伝統から部分的に脱却することを好んでいるということになる。一方、トルコでは予備調査の段階で、母語の「堅苦しさ」や「束縛感」、または外来語の「会話を楽しくさせる」働きのような意見が一つも得られなかった。その原因として、日本人大学生とは異なって、トルコ人大学生は、元々母語の圧力を感じていないことがあると思われる。

最後に、トルコ人のみで抽出されており、トルコ人大学生の「受容意識」を非常に強く抑制する「伝統破壊」因子に注目していただきたい。トルコ人大学生が外来語による「伝統破壊」を重要視しているという本調査の結果は、König&Somuncu（1993）、Toksoz（2011a）の指摘とも整合するものである。Toksoz（2011a）では、トルコ人大学生が日本人より「伝統重視」的な立場を見せていると指摘されており、その理由として、母語とアイデンティティの関連づけ、そして外来語表記の実態の違いが挙げられている。

以上、本研究では、日本人大学生の「効果意識」は「格好良さ」、「表現豊富」、「会話親和」、「軽率さ」の4因子から構成され、このうち「軽率」因子のみが日本人大学生の「受容意識」を抑制していること、他方、トルコ人大学生の「効果意識」は「伝統破壊」と「格好良さ」の2因子から構成され、このうち「伝統破壊」因子の影響力が強く、トルコ人大

学生の「受容意識」を抑制していることを指摘した。今後、両国において外来語に関する意識が実際の運用にどれほど反映されているかを検討する予定である。

注釈

1) 本稿のデータの一部分については、社会言語科学会第 27 回大会で発表を行った。また、博士課程在籍時にご指導を賜りました広島大学文学研究科の今田良信先生、植田康成先生、高永茂先生、五十嵐陽介先生に、深く深く感謝申し上げます。

参考文献

- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』岩場新書
- 井出祥子 (2006) 『わかまへの語用論』大修館書店
- 熊抱ゆかり (2004) 「カタカナ語の氾濫とその使用に於ける深層心理」『福岡大学人文論叢』35(4), pp. 1731-1744.
- 国立国語研究所 (1962-64) 『現代雑誌十種の用語用字』秀英出版
- 国立国語研究所「外来語」委員会編 (2007) 『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』ぎょうせい
- 陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』世界思想社
- TOKSOZ, Levent (2011a) 「トルコ語および日本語における外来語をめぐる意識に関する対照研究」『ニダバ』西日本言語学会 (編) 40, pp. 20-28.
- TOKSOZ, Levent (2011b) [印刷中] 「日本人大学生の外来語受容意識を規定する因子について」『社会言語科学会第 27 回大会発表論文集』4p.
- 文化庁 (2002) 『国語に関する世論調査』(世論調査報告書) 大蔵省印刷局
- 豊田有恒 (1977) 『ビバ日本語』徳間書店
- 梁敏鎬 (2005) 「日韓大学生のアンケートから見た形容詞系外来語の受容意識」『言語科学論集』9, pp. 83-93.
- ERCİLİSUN, Ahmet Bican (1998) *Yabancı Kelimelere Karşılıklar*, T. D. K, Ankara
- KÖNİĞ, Güray & Somuncu, İnci (1993) *Üniversite Öğrencilerinin Anadillerine ve Yabancı Dillere İlişkin Tutumları Üzerine Toplumdilbilimsel bir Araştırma, VII. Dilbilim Kurultayı Bildirileri*
- SEZGİN, Fatih (2004) *Türkçede Batı Kaynaklı Kelimelerin Yoğunluğu*, T. D. K, Ankara
- OSAM, Necdet (1997) *The Attitude of Turkish People Towards the Use of Foreign Words in a Turkish Context*, Hacettepe University, Institute of Social Science